

CSR報告書に対する第三者による所見

CSR報告書での双方向コミュニケーション

CSR報告書はコミュニケーションのツールですが、媒体としての特徴から、情報の流れは一方向になりやすい傾向があります。しかし、今年度の東芝グループの報告書では、冒頭に意見を述べさせていただき、報告書全体の中でご回答いただきました。これは、双方向コミュニケーションを報告書の中で実践されるユニークな試みだと思います。特に、経済危機とCSRに対する私の意見に対して、トップコミットメントで会社の方針をご回答いただいたことは、社会的責任の原点として極めて重要と感じます。

マテリアリティー報告とKPI

今年度の報告書は「マテリアリティー報告」と「マネジメント報告」に分けられていることも重要です。「マテリアリティー報告」と名付けることは単なる名称の変更ではなく、その活動に対するプライオリティを示されていることでもあり、注目すべきと思われます。今後は、「マテリアリティー」と「マネジメント」の関係をより精査されて、CSR経営の基盤強化を進めてほしいと考えます。また、報告書におけるKPIも年々進化していますので、マテリアリティーとKPIが整合的に報告されるように発展していくものと期待しています。

事業を通じた社会と環境への貢献

最近のCSRでは、世界的な傾向として、事業を通じた社会や環境への貢献が強く求められるようになってきていますが、本報告書の特集では各事業分野での環境への貢献が詳細に説明されており、これはこのような世界の動向に合致するものです。事業を通じて、社会や環境をいかに改善するかは最も重要な責任事項と言えるでしょう。今後は、このような事業活動そのものをCSRの目標中に取り込み、体系的に進めていただきたいと思います。同様に、グローバル企業としての各地域のCSR活動も積極的に展開されていますので、こちらでも事業活動のCSRの連携が一層発展することを希望します。

最後になりましたが、社会や環境の問題は一企業で対応できる範囲は限られています。東芝グループが核となって、新しいCSRの社会ビジョンを提示していただけると、より大きな推進力が生まれるものと強く期待しています。

神戸大学大学院経営学研究科教授

國部克彦

第三者所見を受けて

東芝グループでは、CSR経営において取り組む事項をステークホルダーの皆様とのさまざまなコミュニケーションを通じて検証しています。今回の編集にあたって、国内外の有識者お二方から緊要の課題をグローバルな視点で提示いただきました。有識者の皆様から専門的な見地でご意見をいただくことは、CSR経営を進化させていくために重要なことであると考え、継続的に実施していきます。

マテリアリティーに関しては、社会の変化やステークホ

ルダーの関心事の変化を毎年独自の指標に基づいて検証していくとともに、それに基づいたKPIを設定してCSR経営におけるPDCAサイクルを回していきます(P19参照)。

東芝グループは、特集で取り上げた「地球内企業」に思いを込め、今後とも地球環境問題などの社会的課題に対して事業を通じての取り組みを強化していくとともに、世界の各地で信頼される企業をめざしたCSRの遂行を経営の基盤としていきます。